

# 痛快！ 野球見たまま

甦れ！ 高橋周平

中日ドラゴンズの今季の成績は、六二勝七七敗四分。最下位のDeNAと一・五差の五位である。三年連続の下位の成績は、一九五〇年、二リーグ以降、ワーストの記録である。DeNAは、後半戦こそ失速したが、球団自体としては明るい材料に事欠かない。その背景を見てみよう。

中畑監督が就任したのは、二〇一二年。観客動員数は、一六六万人。一三年、一四二万人。一四年、一五六万人。今年は一八二万人に膨らんだ。

中畑監督自身が語っているように、オールスター前は首位で折り返し、横浜球場の大入りが四三回。球団とファンが一体となって“DeNAブーム”を創り出した。筒香嘉智（二十四歳）、山崎康晃（二十三歳・新人王）といったスター選手が出てきたことに加え、球場のエンターテインメント性や、ファンサービスを高めたことで確実にファンに受け入れられている。主力の筒香と梶谷隆幸の二人は、内野手から外野手にコンバートし、守備の不安を一掃し、大き

く羽ばたいた。外野手への転出は、高田繁GMと球団の指示によるもので、選手の育成方針に間違いのなかったことの証左である。筒香は、横浜高校出身の左のスラッガー。同じく関東出身で二歳下の中日の高橋周平の歩みはどうか。高橋もドラフト一位の左のスラッガー。東海大甲府高校出身の人気選手である。高橋の今季の成績は、打率二割八分、四本塁打。ここ三年で最低の成績である。投手は素質、打者は経験という。筒香と高橋の違いは、DeNAと中日の選手の育成方法にあるとしか思えない。DeNAの中畑監督は、筒香の素質をいち早く認め、長距離打者に育てるべく、毎試合出場させた。性格的にはやさしく、内向的な面を覗かせるが、今シーズンは、主将に抜擢して、今やジャパンの四番打者に成長した。

高橋は、打撃コーチの言うことを素直に聞き入れ、打撃術を磨いたが、一軍、二軍のコーチがことごとく変わり、自分の打法を見失ってしまった。三塁手には、ルナ、エルナンデスが入団、ライバ



来期こそはと期待の高橋周平選手



石川選手を指導する加藤コーチ(中央)

十六歳)だけである。森野将彦は二十九歳で、大島洋平は二十六歳でレギュラーに定着したが、二十九歳、二十六歳は若手ではない。巨人の長嶋茂雄監督は、星稜高校出身の松井秀喜を日本の四番打者に育てるように出場機会を与え、自宅にまで呼んで指導した。中日時代の星野仙一監督は、一九八八年に甲子園で活躍した高校生、立浪和義を一年目からショートの新レギュラーに抜擢。当時のショートは本塁打王の宇野勝。宇野は、星野の指示で二塁にコンバート。立浪は、この年に新人王とゴールドグラブ賞を獲得した。

中日にGMが誕生して二年が経過した。成績は二〇一四年四位、一五年五位。落合GMは「俺は黒子に徹するだけ。それがこのチームを浮上させる一番のポイント。監督の思うようにすべてが同じ方向を向いて出発しないとこの船は沈没する」。就任会見の言葉である。GMの成功例は、日本ハム時代の高田繁(現・DeNA)GM。

## 落合博満GMの仕事

中日にGMが誕生して二年が経過した。成績は二〇一四年四位、一五年五位。落合GMは「俺は黒子に徹するだけ。それがこのチームを浮上させる一番のポイント。監督の思うようにすべてが同じ方向を向いて出発しないとこの船は沈没する」。就任会見の言葉である。GMの成功例は、日本ハム時代の高田繁(現・DeNA)GM。

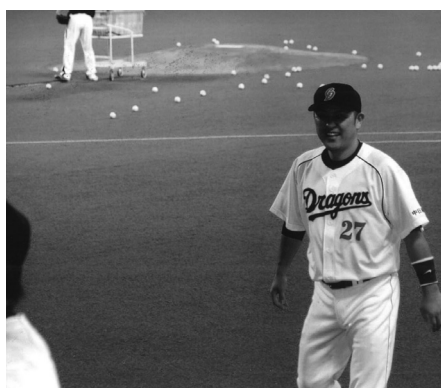
○五年こそ五位に沈んだが、○六年に優勝し、日本シリーズで中日を破って日本一になった。監督はヒルマン。高田GMは投手糸井嘉男(現・オリックス)を外野手にコンバート。糸井は、○九年にブレイク、攻守に優れた一流選手に成長した。ヒルマン監督は、一年目犠打数が六七とリーグ最下位。チームは五位。高田GMはヒルマン監督にアメリカの野球と日本の野球の違いを教え、根気強く説明した。

ヒルマンの野球が劇的に変わった。○六年、犠打が一三三となりリーグ一位。パ・リーグ優勝、日本一を成し遂げた。高田GMは、成果は島田利正球団社長とスカウ

ト陣の力だと説いた。翻って見て、中日のこの三年間に何があったか、フロントは一新、組織は改編に継ぐ改編。球団としての軸が作れなかったことが低迷につながった。

今シーズン入団の新人では、投手の野村亮介、浜田智博、山本雅士、金子丈、四人で○勝。打者では、遠藤一星が後半戦に四一試合に出場、打率二割七分一厘、本塁打四の成績である。長距離砲を求めて、外人の獲得に乗り出したが、ナニータは本塁打○。八月に左肘遊離軟骨の手術を受けたが、実際は開幕前から痛めていたという。

巨人は、今季八月一日で首位阪神を一ゲーム差で追っていた。原辰徳監督は、ナインに「さあ、こ



チームの底上げを図る谷繁監督

ル競争にも負けた。

今シーズン、二年目を迎えた谷繁元信監督の目玉の一つが高橋の起用だった。だが、それは現場の統一見解ではなかった。ある首脳陣は「コーチは一年契約。周平が打てなくてやめさせられるのが嫌だ」と断言している。高い契約金を払った選手に対して育成プランを作り、一軍の出場機会を与えることこそマネージメントではないだろうか。中日は、若手の選手の育成には、不得手の球団である。二〇〇四年以来、落合博満、高木守道、谷繁元信監督と三つの時代があったが、野手の若手でレギュラーに定着したのは、平田良介(二

れからだ。最後に勝つのは巨人だ」と檄を飛ばしたが、こんな時期に球団の白石興二郎オーナーのびつくり発言が飛び出した。野球記者から原監督の去就を聞かれて、「後半の戦いをしっかり見て判断しなければならぬ」。これを聞いて原監督はどう受け止めたのだろうか。明らかに解任をにおわせた発言である。巨人が首位を逃した要因の戦犯は……白石オーナーだと言われても仕方がない。

セ・リーグは、巨人高橋由伸(四十歳)、阪神金本知憲(四十七歳)、DeNAラミレス(四十一歳)の四十代の監督が誕生した。新旧交代のうねりの時代である。巨人、阪神はシーズンの責任を問われ、原、和田の二人の監督が退陣。中日は、三年間下位に低迷。落合GMのこれまでの評価について、白井文吾オーナーは、「落合は一生懸命やっている。君ら(マスコミ)が誤解しているだけだ」。落合GMの成果が見えてこない。チームの低迷は、首脳陣の責任である。白井文吾オーナー、落合GMの責任は重い。